

アフガニスタンの仏教写本

松田和信

一 発端

話は一九九六年十二月のクリスマス数日前に廻ります。オランダのライデン大学で開かれた安世高に関する小さな学会に参加していた時のことです。インドネシア料理店での夕食会の席で、私の友人、ライデン大学のピーター・フェルハーゲン (Peter Verhagen) 博士が、ロンドンで最近入手したと云って、メイフェアの古書籍商サム・フォッグ (Sam Fogg) の新しい商品カタログ『ヒマラヤとインド亜大陸の写本類』をその場にいた私たちに見せてくれました¹。カタログといっても、総カラーで一六〇頁もある豪華なものでした。その中には一七九項目の写本・書籍類が商品として掲載されましたが、その第三十九番として、六点のサンプル写真を附して一〇八点の仏教写本断簡が売りに出されていたのです。一〇八点というのも興味深い数ではありますが、写真の掲載されている六点だけ見ても、貝葉、樺皮、獣皮各二点づつの

写本断片で、用いられた文字もグプタ文字およびギルギット・バーミヤン第一型、同第二型文字。一見して貴重な写本断簡であることが分かります。カタログに附された解説文は当時ベルリン・インド美術館のローレ・ザンダー (Loire Sander) 博士 (現在は定年退職) のアドヴァイスを得て書かれていましたが、一〇八点の中にはカローシユティー文字写本の断片も含まれ、ザンダー博士の見立てでは、書体と内容から判断すれば、一九三〇年フランス人考古学者アッカ (H. Hackin) がアフガニスタン・バーミヤン渓谷の東大仏近くの石窟で発見した一塊の写本断簡に似ているとのことでした。アッカが発見した写本には『摩訶僧祇律』の断簡が含まれていたことから、ザンダー博士は解説文の中で一〇八点も大衆部教団のものではないかの推測を寄せていました。ザンダー博士の推測はさておき、私がある場で写真から読み取れた部分からだけでも、何らかの阿含あるいは律の写本断簡であることが認められ、紛れもない本物でありました。

ライデンの学会後、興奮を抱いたまま現物見たさに私は一人ロンドンへ向かいました。メモしておいた住所にサム・フオッグを訪ねましたが、残念ながらクリスマスマス休暇で店は年明けまで休み。仕方がありませんので、私の二十年來の知り合いで、大英図書館 (British Library) の保存修理部門で働く唯一の日本人職員 (現在は英国籍) の松岡久美子さんにカタログの入手と写本の行方調査をお願いしてそのまま帰国しました。二週間ほどして松岡さんから電話がありました。すでに写本一〇八点はノルウェーの写本蒐集家マーティン・スコイエン (Martin Schøyen) 氏に売られた後でした。ちなみに値段は千二百万円であったとのこと。私は直ちに教えてもらったスコイエン氏の住所に手紙を書くことになりました。スコイエン氏からは暫くして返事が返ってきましたが、文面からは、買った写本を研究者に見せることにはさほど否定的ではないことが窺えました。しかし、こんなものが売られているとは、この時点での私には驚き以外の何ものでもありませんでした。無論ライデンの学会で私の周りにいた研究者たちも同様であったことでしょう。ところがこの一〇八点は、この時から現在に至るアフガニスタンからの仏教写本流出の最初の一滴にすぎなかったのです。その後、スコイエン氏以外の蒐集家たちが入手することになる写本類も含めて、私はそのほとんどすべてを直接目にして調査・研究に従事すると

ともに、それに関連する様々な騒動にも否応なく巻き込まれてゆくことになりました。

二 対面

約十か月後、一九九七年の十月末に私はノルウェーにスコイエン氏を訪ねます。同行したのは、オスロ大学のイエンス・ブロールヴィック (Jens Bratvig) 教授、ミュンヘン大学 (当時はベルリン大学) のイエンス・ハルトマン (Jens-Uwe Hartmann) 教授、それに前述のローレ・ザンダー博士の三人でした。ブロールヴィック、ハルトマンの両教授はライデンで私と一緒にカタログを見て驚いたうちの二人でした。幸いにもブロールヴィック教授が同じオスロ在住のノルウェー人であったことから、この日に至るスコイエン氏との交渉を一手に引き受けてくれたのです。

スコイエン氏はノルウェーの企業グループを率いる会長で、古今東西の文字資料の蒐集に仕事以外の大半の時間を費やしている人でした。住まいも変わっていて、オスロの南数十キロメートルに位置するスピッケスタッドの山中に十七世紀ノルウェーのログハウス風農家を移築して、あたかも世捨て人のようなたたずまいで夫人と二人で暮らしていました。始めて会った時は多少気難しい印象を受けましたが、その後数度訪ね、さらに一九九九年に夫人と来日された時に、京都

私の家にまで来て話し込むうちに何でも聞ける間柄になりました。それによると、氏の文字資料コレクションは一九九六年時点では聖書写本やメソポタミアの粘土板等が主でした。しかし、この年の六月末、ロンドンの大英図書館が「宗教の死海写本」と名付けて収蔵品に新たに加えたガンダーラ語のカロシユティ²イ²イ²巻物について大々的に記者発表を行います。日本でも全国紙各紙にこの外電記事が掲載されたのを覚えていますが、これに感化されてスコイエン氏も同様のアフガニスタンから現れた仏教写本に関心を抱いて買い進めることになったのです。この時発表されたガンダーラ語の巻物二十九巻については、米國ワシントン大学のリチャード・サロモン (Richard Salomon) 教授を中心とするグループによって次々と新しい研究成果が公刊されていることは、皆さんもご存じのことと思います。なおスコイエン氏の企業グループ (オスロ市内ではグループのひとつのスコイエン・バスなどというのも走っている) は、父親の創業したもので、氏自身はそれをただ引き継いだだけのようです。

さてこの時、私たち四人が最初に目にしたものは、バスケットに山盛りになった写本断簡でした。一〇八点などという数ではありません。すでにブロールヴィック教授からの連絡で聞いてはいましたが、スコイエン氏はこの一年間にロンドンのマーケットに次々と現れた写本をほぼ買い占めて、その

量は破片も含めて、数千点にも膨れあがっていたのです。その後、二〇〇一年頃までには、その数はスコイエン氏自身によると二万点を超すこととなります。ただしこれは私たちが数えたわけではありません。その七八割方は数えることすら不可能な破片類なのです。ただし、仏教研究という点から価値を持つと思われる断簡でも約二千点はあるように思います。それから一週間、私たち四人は毎日オスロから通つてスコイエン氏の家で写本を書体別に分類し、整理番号をつけてファイルに入れる作業に没頭します。北欧の美しい調度品で飾られた部屋の中で、最も古いカロシユティイ文字写本から、クシャーナ文字、グプタ文字、ギルギット・バーミヤン第一型文字および第二型文字の、二世紀から八世紀に至る、古代インド文字の展覧会を見るような光景が目の前で繰り広げられることとなります。この時私たちは専ら写本を整理しただけで、写本の写真を入手して本格的に研究を開始するにはさらに半年ほどの時間が必要でした。整理しながら、四人それぞれは写本に現れる単語と文章を斜めに眺めて、いくつもの重要文献が含まれていることに期待を膨らませました。私の場合で言えば、恐らくは五世紀に遡ると思われるグプタ文字貝葉写本の中に「勝鬘夫人」の語を見い出していましたし、ハルトマン教授は「阿闍世王」の名前を発見していました。ただしこの時、私たちのそれからの研究が全面的に輝き

に満ちたものになると思われぬ事実にも、私たちは気づいていました。アツカンが発見し、国立カブール博物館に保存されていたはずの断簡二点が、スコイエン氏のコレクションに紛れ込んでいたのです。これをどう処理したらいいのか、私たち四人に多少の不安がよぎったことも確かなことでした。事実、この不安は、それから七年後、思いもかけない形で私たちに襲いかかることになりました。

三 研究開始

私たち四人がスコイエン氏の家で写本を整理してから半年後、一九九八年の四月頃より写本写真が数度に分けて私たちの手許に届けられました。それは写本断簡を入れた透明フアイルを、スコイエン氏の家で、氏の秘書がカラーコピー機で直接複写したものでしたが、同じものが三セット作成され、オスロとベルリン、そして私のいる京都に置いておくことになりました。カラーコピーですから、長く使うには問題もありませんが、写真がそのままオリジナル・サイズを表しているため、研究には大変便利なものでした。同じ年の六月、私たちはベルリンで会合を持ち、今後の研究と出版について話し合います。その原則は、同定した人による断簡についての優先権があること、そして解説を終えた断簡から順次出版してゆくことにするが、すべてをカバーすることは四人では不

可能であるので、その断簡に関心のある世界の研究者に公開して出版のための原稿を書いてもらうこと等です。

このようにしてまず二〇〇〇年の秋にオスロより研究成果の第一巻が刊行されました。第一巻には約一四〇点の断片から構成される十種の写本が含まれていますが、原稿は十一名によって書かれました。その内容、文字、用紙の材質、著者を示すと以下の通りです。なお括弧内は断簡に対する最初の同定者を表し、それがいないものは著者と同定者が同じであることを示します。

- (一) 『八千頌般若経』クシャーナ 貝葉 Lore Sander (松田)
- (二) *Canḡy'sūtra* グプタ 貝葉 Torkel Brekke (松田)
- (三) 『勝鬘経』グプタ 貝葉 松田
- (四) 『新歳経』グプタ 貝葉 松田
- (五) 『諸法無行経』グプタ 貝葉 J. Braarvig (松田)
- (六) 『阿闍世王経』グプタ 貝葉 Paul Harrison, J.-U. Hartmann (Hartmann)
- (七) 『アシヨーカ王関連の物語文献』グプタ 貝葉 Klaus Wille
- (八) 『摩訶僧祇律』ギルギット・バーミヤン第一型 貝

葉 辛嶋静志

(九) 『大般涅槃經』カローシユティー 貝葉 Mark
Allon, R. Salomon (Salomon)

(十) バクトリア語仏教文書 草書体ギリシヤ文字 獣
皮 Nicholas Sims-Williams

『勝鬘經』や『阿闍世王經』の発見にも興味は引かれますが、この中で特筆すべきは、クシャーナ文字による『八千頌般若經』の貝葉写本断簡数十点が発見されたことです。支婁迦讖訳の『道行般若經』(一七九年)とそんなに異ならぬ年代に書写されたと思われるこの断簡は、この時点では現存最古の大乗經典の写本であることは疑いのないものでした。またそこに認められる言語も『八千頌般若經』の後代のネパール系写本に見られるような梵語ではなく、相当崩れた語形が多く見られました。『マハーウアスツ (Mahāvastu)』の言語と共通性があると言えるかと思えます。³⁾ なおその後、カローシユティー文字ガンダーラ語による『賢劫經』が発見されます。従って現在ではこれが最古の大乗經典写本であるとは言えないかもしれません(後述)。さらに最後の草書体ギリシヤ文字で獣皮に書かれたバクトリア語文書も貴重な発見であろうと思います。これは祈願文のようなもので、仏教聖典の写本ではありませんが、世自在王仏 (Lokesvararaja-

アフガニスタンの仏教写本(松田)

buddha)の名前が現れ、何らかの浄土教との関連が疑われるものです。しかもバクトリア語による仏教文献自体の発見も、著者のシムス・ウイリアムズ教授がすでに紹介している一点を除いて他に類例がないものでした。⁴⁾

なお二〇〇〇年十一月、私たち四人が京都に集まった機会を利用して、東京のノルウェー大使館で私たちの出版を祝うレセプションがノルウェー大使主催で開かれました。第一巻はここで日本の研究者の方々に始めて紹介されました。

四 進展

第一巻の刊行後、第一巻でハルトマン教授の『阿闍世王經』を手伝ったカンタベリー大学のポール・ハリソン (Paul Harrison) 教授がグループに加わり、五名となった私たちは、オスロ、京都等の各自が所属する研究機関で定期的に会合を持ちつつ、研究を続けました。幸いであったのは、二〇〇一年八月から一年間、オスロのノルウェー科学アカデミー高等研究所のプロジェクトに採用され、出版費を含む多額の研究経費の援助を得ると共に、研究所内に複数の部屋を与えられ、そこにスコイエン氏からすべての写本断簡を借り出して、それらを自由に見ることができたことです。この時、すべての断簡はスキヤナーで全く圧縮をかけないで取り込まれて、CD-ROM約一〇〇枚に複写が取られました。これも三セッ

ト作成され、そのひとつは京都にあります。私はこの十年間にノルウェーを二十回近く訪れていますが、先にお話したカラー・コピーとこれを併せれば、その後の研究は現物を見なくてもさほどの不便を感じなくなりました。ただ一言付け加えておきますと、私たちがオスロにいた一年間にも、スコイエン氏のコレクションは増え続けたのです。ただし、新たに入手された断簡類はさらに小さなサイズのものになり、マーカーで断簡類が売り尽くされるのが近いとの感を抱きました。

私はこの年に五度オスロに行き、合計すると二か月ほど研究所に滞在しましたが、このように専らオスロでの作業を通して二〇〇二年九月に第二巻が出版されることになりました。第二巻には約二百二十点の断簡から構成される二十一種の写本と碑銘が含まれます。原稿は十五名によって書かれました。その内容を第一巻同様に紹介すれば以下の通りです。

- (一) *Cāṅgī-sūtra* グプタ 貝葉 J.-U. Hartmann 第一巻の補足と再校訂
- (二) 『大般涅槃経』グプタとギルギット・バーミヤン第一型 貝葉と樺皮 K. Wille
- (三) *Andha-sūtra, Kaṅkumāravadāna-sūtra* 樺皮
ギルギット・バーミヤン第一型 Siglinde Dietz

- (四) 『八千頌般若経』クシャーナ 貝葉 Lore Sander (Wille) 第一巻の追加
- (五) 『阿闍世王経』グプタ 貝葉 P. Harrison, J.-U. Hartmann 第一巻の追加
- (六) 『月上女経』グプタ 貝葉 J. Bratvig, P. Harrison (Wille)
- (七) 『法華経』ギルギット・バーミヤン第一型 貝葉と樺皮 戸田宏文 (松田)
- (八) 『三昧王経』貝葉 ギルギット・バーミヤン第一型 Andrew Skilton (松田)
- (九) 『無量寿経』樺皮 ギルギット・バーミヤン第一型 P. Harrison, J.-U. Hartmann, 松田 (Hartmann)
- (十) 『摩訶僧祇律』ギルギット・バーミヤン第一型 貝葉 辛嶋静志 第一巻の追加
- (十一) *Karmavācānā* ギルギット・バーミヤン第一型 樺皮 Jin-il Chung (Wille)
- (十二) 『舍利弗阿毘曇論』に関連するアビダルマ文献 グプタ 貝葉 松田
- (十三) 仏典に対する初期の注釈書 クシャーナ 貝葉 Lambert Schmithausen
- (十四) 大乘者としてのフヴェイシカ王に言及する断片

グプタ 貝葉 R. Salomon

(十五) ミーマーンサー学派の論典 ギルギット・バーミヤン第一型 樺皮 Ehi Franco

(十六) *Jyotiskavadana* ギルギット・バーミヤン第一型 樺皮 Stefan Baums (Wille)

(十七) マートリチエータの詩作品 グプタとギルギット・バーミヤン第一型 貝葉と樺皮 J. U. Hartmann

(十八) *Jatakamālā* (Arya-Sūtra) ギルギット・バーミヤン第一型と第二型 樺皮 J. U. Hartmann

(十九) *Jatakamālā* (Haribhatta) ギルギット・バーミヤン第一型 樺皮 Michael Hahn (Wille)

(二十) 法身偈 グプタ 銅板 L. Sander

(二十一) 碑銘 カローシユティ 素焼きの壺 R. Salomon

第二巻に寄稿した十五名は、二〇〇一年八月からの一年間に、長期、短期の違いはありますが、全員オスロの研究所を訪れて写本の現物を確認した上でそれぞれの原稿を書いています。特にゲッティンゲン大学のクラウス・ヴィレー博士の活躍には目を見張るものがありました。この一覽を見れば分かるように、第二巻に含まれる多くは博士によって同定され

アフガニスタンの仏教写本 (松田)

たものです。なおこの年の九月十一日の夜、私はハルトマン教授とふたり、オスロのアパートの一室で米国からのテレビ・ニュースに見入ることになります。

第二巻で特筆すべき写本は『無量寿経』の樺皮写本であろうと思います。恐らく六七世紀に書写されたと思なされるこの写本は、回収できたのは経典末尾の一葉と断片類だけでしたが、その文章は既存のネパール系写本に較べて極端に短く、経典末尾の流通偈も『仏名経』に現れる偈に完全に置き換わっていました。このようなヴァージョンは現在まで全く知られていませんでした。また現在ライプチヒ大学のエリ・フランコ教授の担当された非仏教写本や、サロモン教授によるクシャーナ王朝のフヴィシカ王に言及する断片などヴァアラエティに富んだ資料がここではカラー写真を添えて紹介されています。

さらに二〇〇一年頃から、他の蒐集家もスコイエン氏と同様の断簡を入手していることが私たちには具体的に知られてきました。そのうちの二人は我が国の平山郁夫画伯と真宗本願寺派の僧侶、林寺巖州師(現在故人)でした。いずれも数十点単位のコレクションでしたが、私たちはこの二人からも写本の提供を受け、『三昧王経』やクシャーナ文字による『八千頌般若』の断片など、その一部は第二巻に含まれて出版されています。また二〇〇二年の三月、NHKの取材チー

ムがオスロを訪れ、写本と私たちの研究風景、スコイエン氏のインタビュー等を撮影して帰りました。この時の映像の一部は二〇〇三年六月に総合テレビで放映されたテレビ放送開始五十周年記念NHKスペシャル「文明の道〈第三集〉ガンダーラ・仏教飛翔の地」の中で紹介されました。御覧になった方もいらつしやるかと思ひます。

五 写本はどこから

数千点以上にも及ぶこれらの写本断簡類が一体どこで発見されたのか。最初、私たちがスコイエン氏やロンドンの仲介業者から聞いた話では、アフガニスタンのバミヤン渓谷北部に位置する自然の洞窟の中で、タリバンに追われて住み着いた難民によって発見されたとのことでした。第一巻の序文ではそのようなことがブロールヴィック教授によつて書かれています。いずれも伝聞情報で、確実な根拠は何もありませんでした。中にはバミヤン以外の、例えばパキスタンのギルギットあたりから来た写本も含まれていることは大いに想像できました。それを差し引いても、これらの大部分は果たしてバミヤンから来たものなのでしょうか。

実はバミヤンで仏教写本が発見されたことは過去にもありました。前述のように、一九三〇年フランス人考古学者アッカンによつてバミヤン渓谷の東大仏近くの石窟で複数の

写本断簡が発見され、一九三二年、九点の断簡類が一部の写真を附してシルヴァン・レヴィ(Sylvain Lévi)によつて出版されています。⁶⁾この情報は当時我が国でも速報され、その中に含まれていた説一切有部の『集異門足論』の断簡について、後に山田龍城博士は、自著の中で「思うにこの断簡が、カブルより更に一五〇キロも西のバミヤンから発見されたのは、無意味な事ではない……(中略)……ガンダーラ系の集異門足論断簡が、カシミールのギルギットをえらばないで、はるか西のバミヤンから現われ出たことは、我々に無量の感銘を与えずにはいけないのである」とその感激を記しています。⁷⁾

さらに近年研究者に出回っているもので、一九五〇年代にドイツのHerbert HänelとHelmut Humbachによつて、また一九七二年にDebra Kinburg-Salterによつてカブル博物館で撮影された写真があります。両者は同一写本類を撮影したのですが、約四十点の写本断簡が撮影されていて、その中にはレヴィが出版したアッカン発見写本の『摩訶僧祇律』も含まれます。恐らくはこの四十点ほども元はアッカンが発見した写本で、それがカブル博物館に保存されていたものと思われまふ。しかし、アフガニスタンを襲った混乱の中でこれらはすべて略奪され、行方不明となつていました。しかし調査を進めるうちに、前述の二点どころか、レヴィが出版

した九点のうち、最終的に『集異門足論』と『摩訶僧祇律』を含む六点がスコイエン氏のコレクションの中に含まれることに私たちは気づいたのです。しかし略奪された他の断簡はいくら探しても発見されませんでした。六点がノルウェーにあるということは、残りの三十数点も密かに売られて世界のどこかにあるかもしれないのです。

そんな中、二〇〇三年の八月、興味深い情報が東京文化財研究所の山内和也氏よりもたらされます。山内氏はこの年の夏にバミヤンに石窟保存のための予備調査に入り、ひとつの石窟の表面から小さな写本断片約二十点を発見したということです。山内氏は解説のために私に写真を届けてくれましたが、それによると断片はギルギット・バミヤン第一型文字で書かれた桦皮写本の破片に近い断簡で、内容は何らかのアービダルマ文献のようでした。東京文化財研究所は同年九月四日に記者発表を行い、このニュースは翌日の新聞各紙の記事となりました。この発見の持つ意味は、それまでの出所不明のものとは異なり、これがちゃんとした研究者が直接地面から取り上げた写本であるという点です。バミヤンで写本が今なお出土することが確認されたことになりました。それから数か月後、山内氏はさらなる重要情報を私にもたらしめます。この年の秋に再びバミヤンに入った氏は、東大仏から約一・二キロメートルほど離れたザルガラーン地区で崩れた石窟を

目撃します。村人からペルシャ語で聞き取り調査した結果、一九九〇年代の初めに地崩れか地震で石窟が崩壊し、その跡からおびただしい写本断簡が発見され、村人たちによって売られたというのです。この情報は二〇〇四年一月二十一日付の朝日新聞夕刊にも「バミヤンの流出仏典―出土地点解明に期待高まる―」として報道されています。この頃までには、私たちは写本がタリバンに追われた難民によつて発見されたとの情報が間違いないことに薄々気づいてはいましたが、この山内氏の情報の方は相当確度の高いもののように思われました。

さらに数年前バミヤンの写真集を出版した写真家の中淳志氏からも重要な情報もたらされています。中氏より、氏自身がバミヤンの骨董店で確認した数十点の写本断片を見せていただきましたが、その中にザンダー博士が第一巻中に出版したクシャーナ文字『八千頌般若経』と同一写本の小断片が含まれていたのです。

以上のような情報を総合すると、スコイエン氏の数千点、あるいは破片を入れて一万点にも及ぶ写本断簡は、一部の例外を除いて、恐らくはバミヤンの限られた地点から出土したものと考えていいように思います。現在準備を進めている第三巻には山内和也氏から提供されたザルガラーンの崩れた石窟写真も掲載される予定です。

六 暗転

順調に進んでいるかに見えた研究プロジェクトではありましたが、二〇〇四年九月、突然の嵐に私たちは巻き込まれることになりました。スコイエン・コレクシヨンの出所について取材を進めていたノルウェーのテレビ局NRKによって、我が国のNHKの番組とはまったく逆に、スコイエン・コレクシヨンとその研究を非難する二週連続の三十分番組が放送されたのです。この番組はノルウェー国内で大変な話題となり、多くの新聞も追隨報道し、一種のスキャンダルの様相を呈することになります。番組が取り上げたのは仏教写本だけではありませんでしたが、番組の趣旨を一言で紹介すると、不正なルートで紛争地域から出土した文物を買い漁る蒐集家と、その尻馬に乗って研究を行う研究者の行為は果たして倫理的に許されるのかということでした。従ってすべては本来の土地、本来の所有者に返還されねばならぬ。私自身はこれらが決して密輸等の不正なルートでスコイエン氏のもとに来たものとは思いませんが、仮にそんなことを言い出すと、すでにイギリスの国有財産となっている大英図書館のカロシユテイー写本も、大英博物館の収蔵品の多くも大いに問題ありとなつて元の国に戻せということになってしまふでしょう。確かにそのような議論も今は多く耳にします。

しかし私たちの直面していた深刻な問題は、カプール博物館から略奪された六点でした。放送に先立って私のもとにもNRKからメールによる数度の取材がありました。番組制作者が疑っていたのは、スコイエン・コレクシヨンの仏教写本は、バーミヤンから最近発見されたものではなく、一万点すべてカプール博物館から盗まれたものではないのかというものでした。当初はそのような視点に立つて番組が制作されていたものと思われず。私はその前提が間違っていることを強く訴えました。たとえ数点であれ、そのようなものが混入していたことは否定しようもない事実です。最終的に番組は途中でこの数点にハイライトをあてるような体裁のものになりました。今更言い訳しても始まりませんが、私たちがこの事実を知らされたスコイエン氏は、将来アフガニスタンにそれらを返却したい旨の希望を洩らされ、その旨の手紙もカプールに宛てて書いていました。しかし残念ながらテレビ放送には間に合いませんでした。その後、オスロ大学では学長の主催する調査委員会が作られ、長い議論が交わされることになりました。その結果だけ紹介しますと、私たちの研究には如何なる問題も認められないとの結論が下されました。しかし、テレビ放送から今に至る約一年間、進めていた第三巻の出版に向けての作業は中断し、それが再開されたのはつい最近のことになります。この間、私などは日本において、いわ

ば傍観者のようなものでしたが、オスロのブロールヴィック教授は、結果的におとがめなしとはいえ、様々な点で大きな痛手を負うことになってしまいました。

七 今後のこと

再開された第三巻の出版に向けての作業は、現時点では完全に元通りになったわけではありません。出版されるのは恐らく一年ほど先になると思われます。私自身は編集者の一人としての作業以外には、第三巻に新たな写本についての寄稿はしていません。第三巻には、漢訳では宝積部經典のひとつですが、ブロールヴィック教授によるグプタ文字の『菩薩藏經 (*Bodhisattvapiṭaka-sūtra*)』の断簡、ポール・ハリソン教授と東洋大学の渡辺章悟教授によるギルギット・バーミヤン第一型文字の『金剛般若経』。これは全体の半分程度が回収されています。またハルトマン教授の門下生グドゥルン・メルツァー (*Gudrun Melzer*) さんによるナーガールジュナの『中論』の帰敬偈が引用される、金属板に記された歴史文献等が出版されます。さらにシドニー大学のマーク・アロン (*Mark Allon*) 博士によつて炭素十四による写本の年代測定も報告されます。なお第三巻以降も出版は継続されますが、私の話の最後に、それに向けて私が担当することになっている断簡の中から、予告がてら三点ほど紹介しておくことにい

アフガニスタンの仏教写本 (松田)

たします。

ガンダーラ語の賢劫經 前述のNHKの番組中でサロモン教授によつてカローシユティイ文字によるガンダーラ語の貝葉写本断簡一点が紹介されました。この中には「六波羅蜜」の語が現れ、ガンダーラ語による大乘文献の最初の発見とされたものです。番組の時点では一体これが如何なるテキストか不明でしたが、その後、私によつて同定されました。これは『賢劫經 (*Bhadrakalpika-sūtra*)』の断簡でした。さらに同じ写本の断簡は平山郁夫画伯のコレクションも含めて約二十点ほど認められました。『賢劫經』は賢劫千仏に加えて六波羅蜜についての詳細な説明を与えます。私はサロモン教授の門下生で、現在佛教大学講師のアンドリュウ・グラス (*Andrew Glass*) 氏と共同で、第四巻以降にこの二十点を出版するつもりです。とにかくこの断簡は、研究者によつてその存在が推測されてはいましたが、確認のしようがなかったガンダーラ語の大乗經典そのものの発見として話題を呼ぶことにはなるはずです。クシャーナ文字による『八千頌般若経』より古いかもしれません。そうなると、これが現存最古の大乗經典写本ということになります。

ブツダミトラの著作 平山郁夫画伯のコレクション中に見い

だされた五世紀頃のグプタ文字による貝葉写本断簡です。小さな断簡ですが、これが注目されるのは、ちょうどテキスト末尾のコロフォンの一部を含み、それによると、これはアーチャールヤ・ブッダミトラ (Buddharmitra) の著作とされるからです。著作名の部分は一部しか残っていませんが、『解脱：(論)』(Mokṣa-śāstra) なるテキストで、コロフォンの直前には「王の章 (Rajavyāga)」とあり、その後「十七」という数字が書かれています。つまりこの章が最終第十七章ということになります。貝葉のフォーマットと書体から判断して、第二巻でサロモン教授によって公表されたフヴィシカ王に言及する断簡と同一写本に属するように私には思えますが、共同研究者全員が私の考えに同意しているわけではありません。書体が完全には一致しないというのです。いずれにしても、ブッダミトラという人物は仏教史上三人ほど知られていたかと思いますが、その三人のいずれかの失われた著作なのか、あるいは第四のブッダミトラの著作であるのか興味は尽きません。

大衆部の法句経 これはギルギット・パームヤン第一型文字による樺皮写本です。ほぼ完全な一葉と数点の断簡が認められています。恐らくこれはスコイエン・コレクシオンにおける最も巨大な一葉です。『法句経 (Dhammapadam)』の断簡で

すが、偈だけのテキストではなく、偈に先立って因縁物語が付いています。ほぼ完全な一葉には三つの物語が含まれていますが、その中のひとつは、長老サングラーマジツ (Sāmaṅgalāji) の出家物語です。内容はパーリ『ウダーナ』一八の長老サンガーマジ (Sangamāji) の物語とほぼ同じですが、物語の後に示される偈は、パーリ『ウダーナ』一一八の偈と異なり、パーリ『法句経』でいえる第二四五―三四六偈、梵文『ウダーナ・ヴァルガ』でいえば第二章六―七偈に相当する二偈が現れます。因縁物語も法句の偈も『マハーヴァスツ』のような言語ではなく、より古典梵語に近い仏教梵語で書かれています。法句の偈に先立つ一文は、サングラーマジツの物語の場合は *atha khalu bhagavān etasmin vastusmin yāvad inain dharmapadan abhāse* と読み取れます。この中の *yāvad* は中略の意味ですが、この物語のひとつ前の物語では、この部分が省略なく示されていて、その部分は (*eta*) *[sm]ṛjñ vastusmin etasmin nidane etasmin* : (以下下落) : : となっています。これは大衆部の『マハーヴァスツ』や *Abhisamayārikā* で法句の偈が引用される場合の出だしに一致する言い方です。恐らくすべての法句の偈に因縁物語を付けた、大衆部系教団の伝承した巨大な『法句経』写本の一部であるとみなして差し支えないと思います。

スコイエン・コレクションの仏教写本出版

【第一巻】 *Manuscripts in the Schøyen Collection*・I
(*Buddhist Manuscript*, vol. I), Jens Braarvig (General ed.),
Jens Braarvig, Jens-Uwe Hartmann, Kazunobu Matsuda, Lore
Sander (eds.), Hermes Publishing, Oslo 2000.

【第二巻】 *Manuscripts in the Schøyen Collection*・II
(*Buddhist Manuscript*, vol. II), Jens Braarvig (General ed.),
Jens Braarvig, Paul Harrison, Jens-Uwe Hartmann, Kazunobu
Matsuda, Lore Sander (eds.), Hermes Publishing, Oslo 2002.

〔付記〕本稿は、本年六月二〇日、駒澤大学仏教学会の主催する公開講演会で話した内容を再構成したものである。従って、実際に話した内容とは一字一句一致せず、若干の部分についてはカットし、あるいは一部追加した事項も含まれていることを了承いただきたい。特に説一切有部の梵文『長阿含(Dīrgha-aṅgama)』写本に関する部分については、出土地が異なることもあり、全面的にカットした。なお、当日は本稿の最後で触れた新たな写本断簡のローマ字転写、和訳等を配付し、写本写真等もプロジェクトを使用して紹介したが、本稿では割愛させていただく。それらはいずれ私たちの出版第四巻目以降で公表されるはずである。講演会に私を招待して下さった池田練太郎先生、松本史朗先生をはじめとする駒

アフガニスタンの仏教写本(松田)

澤大学仏教学会の方々、および当日私の雑駁な話に付き合っていたいただいた方々に御礼申し上げます。なお、写本発見から出版に至る本稿の前半部分については、私はすでに次のような複数の報告を公にしているので、参照していただければ幸いです。『アフガニスタンからノルウェーへ・本当はなかったことになるかもしれない話』『佛教大学総合研究所報』第十三号(一九九七)二十四―二十八頁。「ノルウェーに現れたアフガニスタン出土仏教写本・マートティン・スコイエン氏のコレクションを訪ねて」『月刊しにか』一九九八年七月号、八十三―八十八頁。「シアトル、そして再びオスロとロンドンへ」『佛教大学総合研究所報』第十五号(一九九八)十四―十六頁。「ノルウェーのスコイエン・コレクションと梵文法華経断簡の発見」『東洋学術研究』第三十八巻第一号(一九九九)四―十九頁。「バーミヤン渓谷から現れた仏教写本の諸相」『古典学の再構築』第七号(二〇〇〇)三十二―三十五頁。「バーミヤン渓谷から現れた仏教写本・スコイエン・コレクション第一巻出版をめぐって」『佛教大学総合研究所報』第十九号(二〇〇二)二十一―二十四頁。「スコイエン・コレクションの仏教写本第二巻」『佛教大学総合研究所報』第二十三号(二〇〇二)十六―十七頁。「アフガニスタンとパキスタンより発見された仏教写本の研究」『論集・原典』(二〇〇三)一〇九―一二〇頁。「未知のアフガン写本」

『日本経済新聞』二〇〇五年四月二十八日付第四十四面（日経記者による代筆）。なお個々の断簡について日本語で書かれたものは、「スコイエン・コレクシヨンの『新歳経』断簡について」『印度学仏教学研究』四十八巻二号（一九九九）三六六―三五九頁。「舍利弗阿毘曇論に関連する三つの梵文断片」『櫻部博士喜寿記念論集・初期仏教からアビダルマへ』（二〇〇二）三八七―四〇〇頁。

（二〇〇五年七月）

〔追記〕 本稿の出版を待つこの一年間にも様々なことが起こった。残念ながら第三巻はまだ刊行されていない。早くても秋になりそうである。現在はメンバーが集まる機会も少なくなつたが、そのため第二巻のように作業がはかどらない。ポール・ハリソン教授は今年一月、ニュージールランドを離れて米国に移住した。この一年で私が一番びつくりしたのは、ノルウェーNRKの番組が、今年の三月、「世界のドキュメンタリー」シリーズの一本として、日本語吹き替えでNHKの衛星第一放送から放映されたことである。日本語タイトルは「歴史が盗まれる・古代遺跡盗掘ルートに迫る」であった。私の顔写真も、さも怪しい学者の一人のように数度画面に現れた。二〇〇四年の放送時は、シアトルのステファン・バウムス（Stefan Baums）氏のプライベートな英文解説を頼りに、

NRKのウェブサイトでノルウェー語版をコピーして見ただけであつたが、今回日本語版を見てよく分かつた。なおカール博物館から略奪されてスコイエン・コレクシヨンに紛れ込んでいる問題の断簡六点は、数か月前にアフガニスタンのカルザイ大統領に直接返還された。返還風景はオスロのアフガニスタン大使館のウェブ上に写真がある（<http://www.afghanemb.com/Afghanistan/manuscript.htm>）。右側写真に見えるフォルダーファイルの断簡が『摩訶僧祇律』である。一九九七年の秋、スコイエン氏の家で私たちは一週間かけてこのようなファイルにすべての断簡を整理したのである。また昨年八月二十九日から九月三日にかけてロンドンで開かれた第十四回国際仏教学会において、私たちのような研究の正当性を擁護するアピールが採択された。これもウェブ上で見ることができ（<http://www.labsinfo.org/resolution.pdf>）。

余談であるが、この春に話題を呼んだ、いわゆるコプト語の「ユダの福音書」にかんするハーバード・クロスニ著『ユダの福音書を追え』（日経ナショナルリゾグラフィック社刊）を読んでいると（二二―頁以降）、ユダの福音書を買おうとした人物としてスコイエン氏の名前が出ている。マーティン・シェーンとなつているが、日本語訳者の知識不足のため、スコイエン氏のことである。さもありませんと思つたが、実は同時期にエジプトで発見された同じコプト語の「マタイ

福音書」のパピルス写本の方はスコイエン氏が買っている。私たちの仏教写本出版の第一巻と第二巻が、スコイエン・コレクション出版では第一、第三巻となっているのは、第二巻としてこのコプト語マタイ福音書がドイツ人研究者によってすでに出版されているからである。私たちの二冊を含むこれらの出版は、日本では横須賀のマルシヨウ貿易書籍部より購入可能である。

(二〇〇六年七月)

注

- (1) *Manuscripts from the Himalayas and the Indian Subcontinent*, (Catalogue 17) Sam Fogg, London, 1996.
- (2) 現在未だこの概説書が三冊の研究成果が刊行されていない。R. Salomon, *Ancient Buddhist Scrolls from Gandhāra: The British Library Kharoṣṭhī Fragments*, Seattle 1999. R. Salomon, *A Gandhārī Version of the Rhinoceros Sūtra* (Gandhāran Buddhist Texts 1), Seattle/London, 2000. Mark Allen, *Three Gandhārī Ekaikāragama-type Sūtras* (Gandhāran Buddhist Texts 2), 2001. Timothy Lenz, *A New Version of the Gandhārī Dharmapada and a Collection of Previous-Birth Stories* (Gandhāran Buddhist Texts 3), 2003. ウェブページを参照 (<http://depts.washington.edu/ebmp/>)。なおコロッセムティー写本などの後にもたびたび発見されている。そのひとつはアフガニスタンの仏教写本(松田)
- (3) 大正大学の西村実則教授によってザンダー博士の出版に基づく言語分析が最近発表された。「大衆部と『般若経』の接点・新出『八千頌般若経』断片を手がかりに」『三康文化研究所年報』第三十七号(二〇〇五年)一三七―一五〇頁。なお西村教授が発見地をヘンダ近郊とされているのは誤解である。
- (4) N. Sims-Williams, *New Light on Ancient Afghanistan, the Decipherment of Bactrian*, London (1997), 同「古代アフガニスタンにおける新発見・ビントゥール・シム北部出土のバクトリア語文書を中心」『古代オリエント博物館情報誌 ORIENTE』第十六号(一九九七)三二―三十七頁。同じ文書の紹介は、森本公誠「北アフガニスタン発見のバクトリア語仏教祈禱文書について」『論集東大寺の歴史学と教学』東大寺(二〇〇三)横組五一―五三頁。
- (5) 番組はポニーキャニオンよりDVDで発売されているほか、書籍にもなっている。『NHKスペシャル 文明の道(二) ヘレニズムと仏教』NHK出版(二〇〇三)。
- (6) Sylvain Lévi, “Note sur des Manuscrits sanscrits provenant de Bamīyan (Afghanistan) et de Glūgit (Cachemire)”, *Journal Asiatique* (1932), pp. 1-45.

アフガニスタンの仏教写本（松田）

四二

- (7) 『梵語仏典の諸文献』（一九五九）一一〇—一一一頁。
- (8) 中淳志『バーミヤン写真報告2002』東方出版（二〇〇二）。
- (9) この断簡写真は注五のNHKの書籍二十五頁に掲載されている。⁹
- (10) *Mahāvastu*, Senart ed., III, p. 91, l. 17, bhagavan etasmin vastusmin etasmin nidane etasmin prakaraṇe taye velāye imān dharmapadam bhāsati. *Abhisamaccarikā*, Jhānanda ed., p. 159, l. 1, bhagavan etasmin vastuni dharmapadam bhāsate. それらの用例については創価大学の辛嶋静志教授、および大正大学の米澤嘉康氏より教示を得た。両氏に御礼申し上げます。